

2020年大会共通論題案「経済学史の未来：経済の理論と歴史から」

経済学史という学問分野を研究するものとして、つまり本学会の会員としてだれもがつねに自問し続ける問題がある。これは、理論研究の一部なのか、歴史学の一部なのかという問題である。これまでの日本における、そしてとくに経済学史学会における、経済学史・思想史研究の歴史の中で、それぞれの時代においてこの問題についてのそれぞれの対応の仕方があった。1980年代まではなによりも、多くはマルクスやウェーバーから歴史を学び、経済学の歴史はそれに対応するように形作られてきた。しかし1970年代からイギリスの政治思想史研究を中心に使われ始めた、言語コンテキストに焦点をあてて論争史の意味をたどる手法が経済思想史に徐々に意識的に取り入れられ、今日の主流の方法であり続けている。これは当初マルクス主義歴史学に対する修正主義という側面ももっていた。しかし、他方で、21世紀に入る前からケインズの、そして21世紀に入るあたりからハイエクの経済学説史・思想史をはじめ、さらにはより現代の経済理論、経済政策を明確に意識した、20世紀の経済学史研究、そして最近では方法論史の研究が劇的に増加してきている。このような状況の中で、仮にこうして経済学史・思想史研究の現状を描くことができても、経済学史・思想史研究者が時代、対象を横断して、歴史と理論の対話を、共通の認識、言語、論理で語り合うことがほとんど不可能な状況になってきている。経済学史の基本要素である歴史と理論をどのように位置づけるかについての共通認識を見出すことはほとんど不可能になってしまっている。決してわれわれは、経済学史という分野全体に通ずる会話をあきらめたわけではないが、しかし他方でそれはもはやかなわぬことなのかもしれないという覚悟も抱きつつある。例えば、かつて、この学会で皆が夢を語るように「市民社会」をともに議論し、そのなかに調和的に理論と歴史を位置づけられた日々は、もうノルタルジアとしてしか存在しえないのかもしれないとさえ思える。

太平洋戦争が終わって間もない昭和二十五年に経済学史学会が設立されてから七十年がすぎ、その決して短くはない歴史の流れのはしにいる我々は、経済学史研究のこのような状況を踏まえ、ここで改めてこの学問に何を求め、それをどのように進めていったらいいのかを、その本質的な構成要素である歴史と理論という視点に帰り、それぞれの専門の視点から経済学史・思想史を照らし出し、経済学史研究者としてそれをどのように受け止めるか考え、新たな出発点のきっかけを見つけることを試みる。これがここでの目的である。そのために、この学会の設立時からさまざまに重きやあり方を変えながらもつねにそこに寄り添い続けてきた史学の一つである大塚史学の今日的な活用を試みている小野塚知二氏、そして多様化しそれ自体全体像が見えにくくなっている現代の経済理論の今後の在り方、あるべき姿を示すことを試みている瀧澤和弘氏に、それぞれ歴史と理論という視点から、いま経済学史・思想史をどのように考え、そこに何を求めているのかを示していただく。また、本学会からは、本学会の伝統の中で古典経済学の研究をすすめながらも、その在り方に、そして方法論的にもつねに批判的な視点を持ち続けてこられた竹本洋会員、20世紀の経済理論についての研究を21世紀の世代としてつづけられている中村隆之会員、18世紀イギリスの政治・経済思想をイギリスの研究環境の中で研究者としてのスター

トした新しい世代に属する佐藤空会員に、それぞれの立場から、小野塚、瀧澤両氏への応答とともに、それを踏まえ自らが考える経済学史・思想史の在り方を提示していただく。